



# 変化の時代のロンドン： SOASにおける研究

東京理科大学 教養教育研究院 神楽坂キャンパス教養部

おおいし えつこ  
大石 悦子

滞 在 地：イギリス ロンドン

在 外 先：SOAS University of London

(the School of Oriental and African Studies)

滞在期間：2023年9月11日～2024年9月3日

## ■SOAS University of London

(ロンドン大学東洋アフリカ研究学院) における研究

SOAS University of London はロンドン中心部に位置しながらも非常に落ち着いた文教地区である Bloomsbury (ブルームズベリー) にあり、Russell Square (ラッセル・スクエア) や the British Museum (大英博物館) も2～5分の徒歩圏にあります。1916年に設立された同大学は、その名が示す通り、アフリカとア

ジアの言語、文学、歴史などの研究拠点としてその地位を確立してきました。現在は221の学部コースを持ち、その中には「日本語と言語学」や「韓国語と歴史」のようなアジア・アフリカの各国言語とその文化を研究対象とするコースから、「(中東、アフリカ、南アジア、東南アジアの) 言語・文化・経済」や「芸術史と世界の哲学」のように、言語と文化研究の視点からその地域や世界全体を俯瞰するような研究コースがあります。



仕事の合間に休憩した Russell Square

開架式 SOAS 図書館は圧巻で、400 の言語で書かれた 130 万の書籍、学術雑誌、視聴覚資料を揃え、主に、アジア、アフリカ、中東研究の資料が集められています。日本語で書かれた書籍の蔵書も、最近出版された本を除くと、かなり充実しており、1924 年に東京實文館から初版された山田孝雄『敬語法の研究』の第 7 版（1940 年出版）のような古い本まで普通に棚に並べられています。

SOAS のこの研究環境が 2023 年 9 月からの 1 年間の在外研究を同大学で行いたいと思った最大の理由です。博士号を Edinburgh 大学言語学学科で取得しているので、Edinburgh 大学の研究環境の良さはよくわかっており、また、2004 年に Oxford 大学 Merton 校で客員研究員として研究した際には研究資料と環境の充実を実感しました。しかし、SOAS には他大学にない研究環境があり、その意味は大きいと考えました。

私の研究分野は「コンテキストにおける言語使用を分析する」学問領域である語用論で、Oxford 大学で教鞭を取っていた哲学者 J. L. Austin の speech act theory（言語行為論）を研究対象にしています。哲学の分野で行われる場合、speech act theory の研究は謝罪、依頼、叱責、論駁といった行為がどのように行われるかを解明する理論研究です。他方、語用論では、これら行為の遂行は特定言語とそれを使う社会のあり方に条件づけられているという考えに立ち、文法や語彙といった各言語の特殊性に起因して「どのような行為がどのように行われるのか」、「行為により、話し手と聞き手の間のコミュニケーションがどのように起こり、展開するのか」を分析対象とします。

通常、この「言語と社会」の特殊性に気づかず、自分たちが行っている行為が典型的行為、典型的コミュニケーションであるという幻想を持ちがちです。この幻想が崩れるのが、異なった言語で行う異なった仕方の行為に直面する時です。SOAS が担っているのは「世界には実に多くの言語があり、言語話者はその言語を使って、様々な仕方でコミュニケーションをし、それによって社会的現実を

作り出し、文化を生み出している」という現実認識と、この認識に基づき、「各言語を深く研究し、その言語研究をもとにその社会や文化を研究する」という研究態度です。

この研究態度は、ともすると言語学が個別言語をサンプルとみなし、それを使って普遍言語の構築とそのバリエーションの記述を目指し、その言語を使って生きている人々に目を向けない言語研究に陥りやすいことと一線を画しています。また近年の翻訳ソフトの普及のために、「ある言語で行うコミュニケーションは他の言語に簡単に移し替え（翻訳）できる」という幻想が蔓延していますが、実際に翻訳可能であるのはコミュニケーションのほんの一部で、また、翻訳ソフトにコミュニケーションをさせるのは不可能です。これは実際の場面で翻訳ソフトを使ってコミュニケーションを取ろうとしてみればすぐわかります。「世界の言語と文化に目を向け、それを深く研究することにより世界を知る」という SOAS の高等教育機関としての使命はこのグローバル化時代により重要になっています。

## ■ロンドンに住むということ

SOAS で語用論研究を行う毎日は充実していました。Austin の speech act theory の語用論的理論展開を行い、その有効性を実際のコミュニケーション分析（英語と日本語）で証明することを目的にした論文 2 つを仕上げることができました。

またロンドンに住むことも集中し、妥協しないで研究することを後押ししました。紀元前 23～20 世紀の



大英博物館正面



大英博物館展示品(Tomb of Kybernis 紀元前 480 年頃)

ギリシャの壺、紀元前19～18世紀のバビロニアの「夜の女王」レリーフ、紀元前7世紀のアッシリアのライオンレリーフなど、古い時代からの芸術品を集め、世界の文明の進化の姿を目の前に見せてくれる the British Museum (1753年設立)の正門前を毎朝通って大学に向かうたび、世界文明に繋がっている気がする安堵感と意味ある仕事をしなければという身の引き締まる思いを感じたものです。

しかし、ロンドンの日常生活はストレスの多いものでした。Edinburghに長く住み、Oxfordの滞在経験もあったので、英国生活は「知っている」気がしていましたが、20年の時を経て、グローバル化とポストコロナ時代の波を受けて、英国社会は大きく変化し、ロンドンではその変化が端的に現れていました。それを一言で言うと「コミュニケーション相手の顔を見ない社会に向かって変化した」ということです。

学生時代も客員研究員の時も、「効率は悪いし、間違いも多いが、きちんと説明すると理解され、問題が解決する社会」というのが私の英国社会の理解でした。その際、形式的判断をするのではなく、私の状況を理解し、それを個人の責任のもとに判断し、事態を変えることのできる人がいて、そういう人が英国社会を支えていました。これが私がこの国を信用し、この国が好きな理由でした。高額の電話料金を請求されたり、船便で送った荷物がいつまで経っても届かなかったりと、様々な問題が起りましたが、窓口対応の人では全く埒があかないものの、その上司が対応し、その人

が事態を理解すると物事がスッと動き始め、問題が解決しました。

今回ロンドンで暮らし、私の知っていたはずの英国社会ではなくなっていて、企業優位の、顧客軽視の社会になっていて、ひどく動揺しました。

ロンドンのフラット(アパート)に入ると電気・ガス・水道は使えるようになっていますが、顧客登録は自分でしなければなりません。不動産会社も大家も一旦賃貸契約が済んでしまうと不親切で、ほとんど助けになりません。インターネットで、まずフラットに電気・ガス・水道を供給している会社が、複数ある会社のうち、どこなのか調べ、顧客登録をします。しかし、企業は自分たちが伝えたい情報はホームページのトップページにわかりやすく載せますが、顧客登録のような情報は様々な項目の中のどこに入っているのかわかりにくく、見つけるだけで一苦労です。登録がうまくできても、電気・ガスのメーター読みは自分でして、インターネット上で登録するようになっていますが(スマート・メーターという機器を入れると自動でメーター読みができますが、機械がうまく作動しないと平均的月額料金を請求されるので、友達が使用料以上の料金を支払わされたと言っていました)。水道料金は定額制で、ホームページに請求額が出て、すぐに支払い方法を設定するよう急かされますが、請求額が月額なのか何なのかどこにも書いてありません。

電気・ガス・水道だけではなく、電話・インターネットプロバイダー・銀行もこの調子で、丁寧な説明のないまま、すべて手続きをインターネット上で行うのが標準なので、当然、疑問点や問題が出てきます。そこで、担当者に連絡しようと思いますが、ホームページに電話番号が載っていなかったりします。電話番号が載っていても1時間近く待たされたりします。うまく電話が通じて、「…については1を押してください」のようなアナウンスが流れても、その選択肢は大抵料金確認など単純なものなので、選択できる番号がなく、「その他」



St James's Squareの桜



老舗デパートLibertyの前

のような選択肢もないので、結局、疑問も問題も解決しません。

仕方なく、チャットやAIチャットを試すことになりませんが、AIチャットはあまりにトンチンカンです。「質問内容を以下から選択してください」とメッセージが出るので「その他」を選び、その中にも選択肢がないので「質問は…です」というように書くと、とんでもない項目が出てきて、「これについての質問ですか?」と聞かれるので、「違います」と答えると、最初の「質問内容を以下から選択してください」に戻ったりします。人間がチャットしている場合は、ある程度通じますが、「これに関してはホームページ…を見てください」とか、質問内容に関係なく、企業のポリシーとか法的義務の説明が数十行にわたって出てきたりするので、やはりコミュニケーション相手として尊重されていない気がして嫌な気分になります。

これら全てのことが如実に表しているのは「英国社会が公共性の高い企業も含め、顧客を1人の人、コミュニケーションの相手として扱わないことを許容している」ということです。これら企業にとって顧客は単に製品やサービスを買ひ、その対価を払う人々で、個人の特性からくる疑問や問題に答えるのは企業活動にとって中心的なことではなく、最低限でいいと考えているということです。それを経済的無駄と考えているふしさえあります。誰もが否応なしに利用するため公共性が高く、そのため、様々な事情を持った人とのコミュニケーションが必要なはずの企業までもこのような顧客態度をとることを英国社会が許していることに愕然としました。かつて、私を特性を持つ個人、顔のある1人の人として扱い、私の状況を判断し、問題を解決してくれたあの人たちはいなくなったかのようでした。

## ■グローバル化した世界のポストコロナ時代

このロンドン生活に端的に現れる英国社会の変化はグローバル化した世界のポストコロナ時代の変化で、程度の差こそあれ、経済大国の傾向で、特に国際都市で顕著にみられます。かつて私たちはグローバル化を「世界の国々が繋がり、全世界が様々な価値観を知り、享受できる動き」として歓迎しました。コロナ時代も、コロナ蔓延の脅威の中、「経済・社会活動を止めない」というスローガンのもと、インターネットを駆使し、対面しなくても活動できる基盤を整えました。しかし、今、目の当たりにしているのは、普遍的価値を追求し、享受する世界ではなく、人を経済活動の対象としか見

ず営利活動を行うグローバル企業の台頭と、帝国主義時代さながらの、力で小国を抑えようとする強国の傲慢さです。

2024年ノーベル平和賞受賞式のスピーチの中で、日本被団協の田中熙巳さん(1960年東京理科大学理学部物理学科卒)は1945年8月9日の長崎原爆投下の3日後、爆心地を訪れた時にその惨状を見て「たとえ戦争といえどもこんな殺し方、こんな傷つけ方をしてはいけない」と強く感じたと述べました。13歳の少年でも、経験者にはわかる普遍的価値です。

相手の顔を見ない、特性を持つ個人と扱わない「コミュニケーション」では、その人の経験に基づいた、その人の社会的現実からくる発言を、進めようとしている事態に関係ないこととして、無視します。普遍的価値を共有する手段、普遍的価値に繋がっているという安心感をもたらす手段であるはずのコミュニケーションの力が発揮されにくい時代を迎えています。コミュニケーションの力が正義をなすために無力であるという失望感が広がっている時代です。

私はコミュニケーションを特定言語とそれを使う社会のあり方に条件づけられた行為であるという語用論的 speech act theory の研究をすすめ、コミュニケーションが「特性をもち、経験に裏打ちされた人格を持つ個人である話し手の同様に特性と人格を持つ個人である聞き手に対する働きかけ」であり、コミュニケーションは価値共有できる場であることを証明しようと思います。それによって、現状のコミュニケーションがどう歪んでいるかを明らかにし、この時代の失望感に対抗しようと思っています。



バスの車窓から見たOxford Street

